



# くらはし

舞鶴市立倉梯小学校  
学校だより5月号  
令和8年4月30日

## 朝の一步と放課後の一步 ~寄り添いの姿から~

校舎の横に、今年もコデマリの花が咲き始めました。細い枝いっぱい、小さな白い花が丸く集まって咲く姿は、春のやわらかな日差しの中で、見る人の心を静かに和ませてくれます。コデマリは「小手毬」と書きます。一つ一つは小さな花ですが、寄り集まって咲く様子が手毬のように見えることから名付けられたといわれています。互いに寄り添い、支え合いながら一つの形をつくるその姿は、学校生活の中で育つ子どもたちの姿と重なって見えます。

先日の登校の様子で、心に残る出来事がありました。ある朝、登校班とは少し遅れて、姉弟二人が手をつなぎ、並んで学校へ向かって歩いていました。弟は1年生。その日はどうやら「学校に行きたくない」という気持ちを抱えていたようでした。

その日は土曜日の登校日。いつもはお仕事のご家族がお休みの日でした。家にいたい、という思いは、ごく自然な気持ちだったのだと思います。

弟は、「行きたくない」という気持ちを押さえながら、姉の存在に背中を押され、一步一步学校へ向かって歩いてきたのでしょう。ぎゅっと握られた手と、弟を包み込むような優しいまなざし。その姿から、子どもたちが一人一人、自分なりに思いを受け止め、乗り越えようとする力をもっていることを強く感じました。子どものもつ「個の強さ」に触れるたび、いつも心が揺さぶられます。

私たち大人は、つい手を差し伸べ、前に立って支えようとしがちです。しかし、ときには一歩下がり、子どもたちの姿を信じて見守ることも大切なのだと、改めて教えられました。子どもたちは、守られるだけの存在ではありません。人との関わりの中で力を発揮し、成長していく存在です。そんな子どもたちの確かな歩みを、学校として、これからも丁寧に見つめていきたいと思います。

放課後のグラウンドでは、毎日、陸上練習が続いています。大会に出場する6年生に加えて出場しない6年生や、来年に向けて体験的に参加している5年生も一緒になり、およそ70名の児童が汗を流しています。グラウンドには、いつも大きな活気があります。

一人で取り組みば苦しい練習も、仲間の存在があるからこそ、踏み出せる一歩があります。励まし合い、支え合いながら自分の限界に挑む姿は、倉梯小学校がこれまで大切にしてきた姿そのものです。

登校途中の姉弟の姿と、放課後の陸上練習に励む子どもたちの姿。一見すると異なる場面ですが、そこには共通する大切な価値が流れているように感じます。それは、「一人ではない」という実感です。姉に寄り添われながら、弟は不安な気持ちを抱えつつも一歩を踏み出しました。陸上練習では、仲間の存在に支えられながら、それぞれが自分の限界に挑んでいます。子どもたちは、誰かの存在を力に変え、前へ進む術を、日々の学校生活の中で自然と身に付けているのだと思います。

私たち大人ができることは、その一歩を代わりに踏み出すことではありません。その力が発揮される場を整え、必要なときにそっと寄り添い、信じて見守ることなのだと思います。子ども同士の間で育つ力こそが、これからの社会を生きていく確かな土台になると感じています。

校舎の横で咲くコデマリの花のように、一つ一つは小さくても、互いに寄り添い、支え合いながら、やさしく、そして確かな形をつくっていく子どもたち。その成長を、これからも大切に見つめ、育んでいきたいと思います。

校長 四方 直人